

大牟田市立天の原小学校

1 本校のESDの特徴

本校は、大牟田市南部に位置し、校区南側に野間川が流れるとともに校区北部には高取山がある。また、国指定の装飾古墳「萩の尾古墳」もあり、自然環境や文化的環境に恵まれている。さらに、市立の特別支援学校にも近い。そこで、本校のESDでは、環境教育と福祉教育を中心に据え、1年生から6年生まで生活科や総合的な学習の時間においてESDを推進している。

2 ユネスコスクールとしての活動・全体計画（生活科・生活、総合的な学習の時間・総合）

	環境教育		福祉教育	
1年	ひとつぶのたねから	生活	ひろがれえがお	生活
2年	ぐんぐんのびろ	生活	みんな大きくなったよね	生活
3年	学校に飛んでくる鳥を観察しよう	総合	仲よし交流会をしよう 障害のある方の気持ちを知ろう	総合 総合
4年	リサイクルの仕組みを考えよう	総合	七夕飾り・七夕交流をしよう	総合
5年	野間川環境探検隊	総合	ふれあい遊び交流をしよう	総合
6年	世界の環境問題について調べよう	総合	高齢者の気持ちを知ろう	総合

3 特徴的な活動事例

<【環境教育】5年生「野間川環境調査隊」（総合的な学習の時間 1学期）>

(1) 目標

○身近な川に住む生物や水質に興味を持ち、環境と自分たちの生活との関わりについて調べる活動を通して、環境を守り続けるための自分の生き方について意欲的に追究し、天の原の環境を守っていかうとする態度を身に付けることができる。

(2) 実践の展開

①環境問題についての新聞記事について話し合おう。

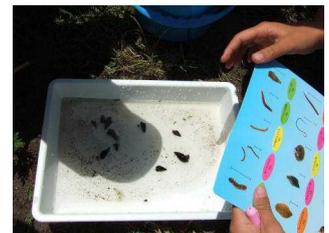
- ・メダカが絶滅危惧種に指定されたという内容の新聞記事を提示し、その原因や調べてみたいことについて話し合った。教室でもメダカを飼っており、身近な生き物であるメダカが絶滅危惧種になっていることに驚き、課題意識を持つことができた。

②インターネットや本を使って、水生生物と環境との関係について調べよう。

- ・環境と生き物との関わりに興味を持つことができ、様々な環境調査の方法があることに気づき、身近な川である野間川の環境を調べたいという意欲につながった。

③環境指標生物、透視度、CODパックを使って野間川の調査をし、環境を調べよう。

- ・大牟田市環境保全課の方を招いて、住んでいる生物から川の汚れ具合がわかる環境指標生物調査、透視度計を使っての透視度調査、川の水から汚れ具合が分かるCODパック調査の3つの方法の説明をしてもらい、詳しく調べたい内容をもとにグループ分けをし、中流と下



流の2カ所で調査を行った。子どもたちは意欲的に調査活動をすることができ、野間川は中流よりも下流の方が汚れているという調査結果が出た。

④上流の調査結果を知り、川の環境が悪くなる原因について話し合い、環境を汚さない方法について調べよう。

・時期が遅く、上流での調査活動ができなかったため、後日大牟田市環境保全課の方に上流の水を採取してもらい、子どもたちの前で3つの調査をしてもらったところ、上流は水が一番きれいという結果がでた。そこで、中流や下流域になるとなぜ汚れてしまうのかについて調べ学習をした。最後に、たったの醤油1滴でもそれをきれいな水にするためにはたくさんの水が必要になることや、家庭や工場からの排水、特に台所の排水によって川の環境が悪くなっていることを大牟田市環境保全課の方に教えてもらった。

⑤追究したことをまとめ、自分たちにできることを話し合おう。

・シャンプーや石けんや台所洗剤などは必要以上に使わない、皿についた汚れはなるべく取り除いて洗う、環境にやさしいシャンプーや洗剤などを使う、米のとぎ汁は栄養分を含んでいるので水やりに使うなど、子どもたちなりに野間川の環境を守るためにできることを考えた。最後に、ポスターにして店や病院や公民館に貼らせてもらったり、地元のラジオ局「FMたんと」で野間川環境調査隊の取り組みを紹介したり、全校児童によびかけをしたりして野間川の環境を守るために自分たちにできること発信をした。



(3) 子どもたちの様子

身近に感じているメダカでさえも環境危惧種に指定されているという事実から、環境を守りたい、自分達の地域の川はどうだろうかという目的意識を持って意欲的に取り組む姿が見られた。特に、水質調査では実際の汚れ具合が具体的な色や数値で結果が出たり、大牟田市環境保全課の方からの川の環境が悪くなる原因についての話を聞いたりして、環境を守るために自分たちにできることは何かという課題につなげることができた。

(4) 成果と課題

○中流と下流の水質調査において、距離が離れていなかったため、中流も下流も似たような結果になったグループもあった。今後は、草が生い茂る前の早い時期に上流も調査をし、また下流においては河口付近を調査する必要がある。

○発信段階での「伝える力」の充実が必要である。

4 本年度の成果と課題

○成果

・環境教育・福祉教育とも開校後4年間、各学年で行う活動内容を変えずに継続的に行うことで、前年度行った活動を本年度の子どもたちも引き継ぎ、より工夫された活動が見られた。

○課題

・継続的に行うことで、いい面もあるが、より主体的な活動にするためには、子ども自らが見つけた課題や新しい活動を取り入れていく必要がある。また、学年間において、発達段階を考慮しての内容の見直しも必要である。